

## 時制とアスペクトをめぐる<sup>1</sup>

—特に過去時称を中心に—

### 1. 仮説の提示

§1 特にスラヴ語の研究者の間では、これらの言語に特徴的な動詞のアスペクトについては、従来様々に論議が重ねられてきたが、未だに決定的なものが得られたとは、必ずしも言えないのが現状である。多くの文法書においては、不完了体動詞が行為をその継続乃至は発展、未完了の相において捉えるのに対し、完了体動詞は行為を完了の相において捉えるとしているものが多いが、これは畢竟便宜的なものの域を出ない。完了体動詞は必ずしも完了のみならず、始発をも表すというように、これを逸脱する例が枚挙に遑がないからである。「完了」という概念に矛盾する事実に関しては、行為を点として、乃至は瞬間的或いは「限定的」な観念の仕方によるとする修正も見られる<sup>2</sup>。不完了のアスペクトに関しては、たとえばドスタールの如く、不完了体動詞の場合においても、それが過去形において用いられるならば、それが表すところの「行為」は、発話の時点において既に完了しているとし<sup>3</sup>、前者を線形的、後者を一点集中的な認識様式を示すなどとする研究者もある。ここから彼は完了のアスペクトの場合は行為を「全体的なもの」celkové pojetíとして、また不完了体のアスペクトをその反対概念として、即ち「全体性」の欠如を示すものとして観ずるのであることを主張する。両者を一つの「欠如的対立」privative Oppositionとして観ようとするのである<sup>4</sup>。

§2 このような体の範疇をめぐる諸説の中で、際だった特異性を呈しているのは、ポーランドの学者エルヴィン・コシュミーダーの為すところの説である。彼は人が乗り物に乗っているときに、その周囲で生起する事件は、必然的に時と共に発展するのに対し、車窓の外の景色は、人に対して前方から迫り、話者と一致するや瞬時に後方に流れ去るのと同じように、話者が時間軸に沿って移動しているという意識を有しているときには時間は話者と共に過去から未来への方向性を持ち、不完了形によってこれを表すが、話者が移動していないと意識している場合には、時間は未来から過去への方向性を持ち、完了形によってこれを表現するという。いわば相対理論である。

<sup>1</sup> 『デュナミス』第2号 1998年3月10日 1-28頁。

<sup>2</sup> 例えば J. J. Mikkola, *Urslavische Grammatik*, Bd. III, Heidelberg 1950, p. 63. cf. 原文1.

<sup>3</sup> Antonín Dostál, *Studie o vidovém systému v staroslověštině*, Praha 1954, p. 13. cf. 原文2.

<sup>4</sup> A. Dostál, *op.cit.*, p. 15. cf. 原文2.

この場合、主たる関心事となっているのは専らアスペクトであって、時制は話者の発話の時点との相対的な位置関係以上のものとは考えられていないと思われる。即ち、

アスペクトと時制は私が既に様々に立証しようと試みたように、時間の観念の主要な要素 — 運動と位置関係 — に依拠する二種類の時間関係の叙述のための言語表現である。アスペクトは方向関係の表現に、時制は時間的段階関係の表現に用いられる。両者は話者の自我の現在感覚、および次の関係、すなわち、時間における自我と事件の方向と位置関係に関して、自我が自己と、表現する事件との間に、指定するところの関係にその根を有している<sup>5</sup>。

§3 ここでコシュミーダーが、「両者は話者の自我の現在感覚、および次の関係、すなわち、時間における自我と事件の方向と位置関係に関して、自我が自己と、表現する事件との間に、指定するところの関係にその根を有している」としているのは、重要であると思われる。彼はこれについて次のように言う。

時間の外にあり、時間が傍らを過ぎ去るに任せる自我と、時間に組み込まれ、それを越えて時間が動いていく自我との対立は、時間の外にあって外側から時間に沿って進む自我と、時間の中にあつて常に未来へと進み行く(従つて時間の内部でこれに沿って進むということができよう)自我との対立と同じく、我々の問題にとって重要ではない。私の考えでは自我が二つの動きの把握のどちらかにおける時間的位置の値と関係づけられる限り、まさにそのことによって時間の中に組み込まれていることには疑いがない。時間的位置の値が自己の傍らを通るに任せる自我は、まさにそのことによって時間の中に組み込まれる。時間はこのイメージにおいては動きとして考えられる。この動きは相対的である。したがって、自我と時間的位置の値との間の変化について二つの動きの把握の仕方がある。私が止まっていれば時間的位置が動き、或いは時間的位置が止まっていれば、私が動く。……

私の傍らを通ることと私を越えて進むことは、絶えず未来へ進み行くことと外側から時間について進むことと同じく、同じ動きの捉え方の純粋に外面的に異なった表現に過ぎない(強調原文)<sup>6</sup>。

彼はここにおいて、二つの時間の把握の仕方が、ともに時間の流れの中にある「我」の現在の感覚に根差した、ものの見方によるのであることを強調しているのである。

これに対してもしそうとするならば、現在時称においては完了のアスペクトは不可能になるのではないかという疑問が、当然のこととして現れてくる。何故ならば、もし完了のアスペクトにおいて、時間が未来から過去への方向性を持つとすれば、これが発話の時点を通過するのは須臾の間に過ぎないであろうからである。

まさにこのことが、彼に対するその後の批判と反論の中心になる。これに対してコシュミーダーは例えば次のように答える。

しかし完了性は一致した場合に何故現在を表すことができるのであろうか。発話と行為の

<sup>5</sup>Erwin Koschmieder, *Durchkreuzungen von Aspekt- und Tempussystem in Präsens*, IF, 1930, p. 341. cf. 原文3.

<sup>6</sup>E. Koschmieder, *Zu den Grundfragen der Aspekttheorie*, IF, 1935, p. 281. cf. 原文4.

一致は現在においてのみ考え得る。過去或いは未来の場合には何かについて語られることのみが可能だからである。

しかし私のことばを発することが、まさにそれについて私が語る行為であるということを私が現在において表現しようとするならば、私は現在においてこの行為の「開始」を表現することになる。そして、現在においてそれができるのは、その語を発するまさにそのことが、行為の現実化だからである。……かくして一致が現在における「開始」を表現するときには、完了性が相応しいのである（強調原文）<sup>7</sup>。

§4 この考え方には少なくとも二つの問題があると思われる。一つにはスラヴ語において完了体現在が必ずしも行為の「開始」Eintretenを表すとは限らないからであり、また一つにはここにおいて現在、過去、未来は、何れも発話の時点に対する相対的な位置、彼のいう「時間的位置の値」に依存していると考えられるからである。しかし他方、彼が「その語を発するまさにそのことが、行為の現実化だからである」としているのは、極めて興味深い。

彼はこのような「時間」と「アスペクト」との絡み合いを「時制」と考え、その関係をさまざまに論じている。特に現在との関わりについては、独立の論文を草しさえしている<sup>8</sup>。時制を時間とアスペクトの絡み合いの結果であるとする考え自体は、正しいと考えられる。

この両者の関係がどうであるかを論ずるのは別に、独立して個々の時制形式についてその機能的意味を論じたものに、細江逸記の名著『動詞時制の研究』<sup>9</sup>がある。細江は現在形を「直感直叙」の形式、過去形を「回想叙述」の形式、未来形を「想像叙述」の形式とし、また完了形を「確認確述の形式」、英語に特徴的な進行形を「集注叙述」の形式として、その根拠を例示している。

§5 細江が論ずるところの時制の意味は、極めて肯綮に当たるものであるといえるが、これについては後に述べるところがある。このような機能的意味は、コシュミーダーに見られるような時間とアスペクトのいかなる交錯からも得られるとは思えない。このことは兼ねてより疑問とするところであったが、その理由を、時間を単なる発話時との相対的な位置関係にのみ求めることにあつた為ではなかったかと考えるに至った。

もしそうとすれば、この場合に時間をどのように考えるべきかという問題になる。今、仮に時制に内包される時間を、事件の生じる時点と発話の時点との位置的な相関関係のみを求めるのではなく、事件の生じる時点が発話の時点に近づきつつあるか、遠ざかりつつあるかという感覚の問題として捉えればどうなるであろうか。その際時間は常に未来から過去の方向に進むと考える。そうすれば過去に生じた事件は、それが既に生じたこと

<sup>7</sup>E. Koschmieder, Zu den Grundfragen... , pp. 294-295. cf. 原文5.

<sup>8</sup>cf. Durchkreuzungen von Aspekt- und Tempussystem in Präsens, *Zeitschrift für slavische Philologie*, Bd.VII, 1930, pp. 341-358.

<sup>9</sup>細江逸記『動詞時制の研究』第8版 昭和30年4月10日(初版 昭和7年2月15日) 泰文堂。

故に時の流れの上に確固たる位置を占め、話者の感覚からすれば、絶えず遠ざかりつつあるものとして観念される。これに対して未来に生じるであろう事件については、未だ時の流れの上に位置を占めることはなく、ただ想定されるに過ぎない。事件の生起が想定されること自体は確実であって、もし想定されることがなければ、人は未来時を以て語ることもないであろう。その生起の時点は一般に確実なものではあり得ないが、確信を持って、或いはことの成り行きから極めて蓋然性の高いものとして想定することは、猶可能である。

§6 これに対して現在の場合には問題が残るであろう。時の流れは寸時もとどまることなく、絶えず過去へと流れていくからである。この場合にはコシュミーダーの述べている「しかし私は私が自分のことばを発することが、まさにそれについて私が話す行為であるから、私はこの行為の「開始」を現在において表現するが、現在においてそれができるのは、その語を発するまさにそのことが、行為の現実化だからである。……かくして一致が現在における「開始」を表現するときには、完了性が相応しいのである」という言説は、彼自身の本来の意図とは関わりなく、極めて示唆に富んだものということができそうである。

人がたとえば「私は行く」と言う時、「行く」なる行為は確かに発話の瞬間に行われるか、その行為がまさに起こらんとしていることを示している。コシュミーダーが行為の「開始」というのは、まさにこのことを指していると解される。しかし「行く」行為の實質をなす例えば「歩み」は一步一步行われるや否や過去に属するものとならざるを得ない。しかしその最後の「一歩」は、明らかに発話の時点においてなされることもまた、疑いがない。このような「歩み」の総体として、「行く」という行為が成立しているとするれば、その行為は少なくとも遂行されつつある最後の部分において発話の時点と関わっている。

§7 更に「学校に行く」という場合を考えてみる。これは今述べた最後の部分において発話の瞬間と一致する「行為」がその当然と確信される成り行きの結果として、「学校」の敷地内において行われることが予測されていると考えることができる。換言すれば、この場合「行く」という行為がその半ばにおいて発話の時点と重なっていると考えることもできる。現在が一定の幅を持つということの内実は、このようなものに他ならないと考えられる。これは譬えていえば、一卷の反物の軸が杭に掛けられていてそこから繰り出される布が流れの中に絶えず伸びていくさまに似ている。巻かれていた反物がすべて解け去ったとき、布は、杭を離れて川下へと流れ去って行くであろう。この際流れから見れば杭は流れと反対方向に進んでいくという錯覚を生じることであろう。コシュミーダーが、時間が未来へ向かって進むと説くのは、実はこのような場合を指してのことではあるまいか。

§8 翻って過去についてみれば、過去においてこのようなことが可能であるとすれば、それは基準となる時点を既に過去になったある一点に置くからに他ならない。それは常識的に考えれば、叙述しようとする事件の発端であろう。しかしこの時設定された時点は、

観念的なものには過ぎないが、少なくとも発話の瞬間からの相対的距離は不変であると見なされる。その限りにおいてここでも時間が未来に向いていると感じられることはよく理解できる。

更に未来についてみれば、例えば「彼に逢えばこうも言おうああも言おう」と考えるような場合が考えられる。一般に未来に関しても、参照点が置かれる場合と、そうでない場合があると思われるが、もしそれが置かれるならば、参照点は未来のある時点に想定される。しかしその時点は過去の場合と異なり、単に確定されていないだけでなく、その実現、即ち「逢うということ」も危ういことが屢々であろう。逆にそのような事実が確実に未来において生起するであろうと確信する場合もあり得る。この場合にはその時点が話者の現在に向かって近づきつつあると感じるに違いない。

## 2. 過去時称

§9 細江は英語の過去時称には一つの形があるのみであるが、古典文法では完了形 *perfectum* (正確には現在完了形 *perfectum praesenti*) と未完了過去 *imperfectum* の二つの形式を有し、英語の過去形はこの二つの形式に対応するものであって、完了形に対応するものを「直断性の Past」、後者を「低回性の Past」と称している。彼はゾンネンシャイン *Sonnenschein* の例を引用しながら、次のように述べている。

これを古典文法に當て箴めて考へて見ると、前者は“Perfect”に該當し、それはかの有名な *Cæsar* の報告文にある

*Veni, vidi, vici.*

(= I came, I saw, I conquered.)

の各動詞の如く、その表示する事件を簡明率直に陳述し、一氣にこれを片付けて仕舞ふものであるに反し、後者は“Imperfect”に相當し、例へば

*Rōmae bīnōs cōsulēs quotanniīs creābant.*

(At Rome they elected a pair of consuls yearly.)

に於ける“*creābant*”の如く、或事柄を述ぶると共に、それをよく噛みしめて味はふ様な氣持を伴ふものである。私は前者を『直断性の“Past”』と稱へ、後者を『低回性の“Past”』と名附ける<sup>10</sup>。

## §10 細江はその例として

\* *Cocks crew, carts creaked, men shouted, women called, children yelled, mules brayed, fishermen hauling in nets execrated, dogs barked, hens laid, church bells rang; in short, day had arrived.*

—Rose Macaulay, *Keeping up Appearances*, I. i.

<sup>10</sup>細江逸記 *op. cit.*, pp. 87–88.

(鶏が鳴き、車が軋み、男はどなり、女は大声を張り、子供等はわめき、驟馬は嘶き、網をたぐり入れる漁師達は罵り、犬は吠え、牝鶏は産卵を告げ、お寺の鐘は鳴った。つまり夜が明けたのであつた。)

\* You were in my husband's counsel, sat  
often at his table, knew his private mind.

-Binyon, *Boadicea*, I.

(御身は故王の樞機に参し、屢その食卓に侍し、大御心の奥までも知つた身である。)

などの例を挙げ、

かくてこれ等の例をよく心の鏡に照して見ると、前者即ち Perfect は極めて事務的であるに反し、後者、即ち Imperfect の方は多分の情緒のこれに伴ふことが観取される。此事は西洋の學者も時々注目して居るので Jespersen の如きも “there is often a distinctive emotional colouring” と言つて居る (*The Philosophy of Grammar*, p.276) が、これ實に私の言ふ低回性の露出でありその餘韻に外ならない<sup>11</sup>。

と述べている。

§11 更に彼は *I have (got) a headache*. 或いは *I thought you were not looking well*. などが機能において現在と同等である (In some cases it (i.e. the Preterite) is used as the equivalent of a full present.) とするスイートの説を引用してこれを称揚しながら、

然し完き現在に相當するとの説と、然らば何が故に、換言すれば如何なる意義關係によつて “Past Tense” が用ひられるかの理由の説明に於いては技巧に過ぎて肯綮に當らず、その價値は毫も Sonnenschein と選ぶところが無い。……私をして言はしむれば、くどいことではあるが、文法上の Tense なるものは本來思想様式の區別を表はすものであるといふ事實に醒めざる限り Tense の用法中に存する謎は解き得ないので、此場合に就いても動詞は “Past Tense” のうちの Imperfect であつて、その表はす思想の低回性はこゝに露出して餘韻に情緒を伴ふので “Past Tense” と名付くるものは本來決して「過去の時」を表はすものではないのである<sup>12</sup>。

この全く正しいと思われる所説にも関わらず、結局のところ細江もまた、彼の言うところの「低回性」が何に起因するかについて、遂に述べるところがなかった。誠に画龍点睛を欠くの憾みなしとしない。

§12 筆者の観ずるところによれば、この低回性の依つて来る所以のところは、恐らくは二つの点に存していると思われる。即ち一つにはその過去時である。先に筆者は過去に位置された事件は絶えず現在に位置する発話の地点から遠ざかりつつあると述べた。時間は

<sup>11</sup>細江逸記 *op. cit.*, pp. 93-95.

<sup>12</sup>細江逸記 *op. cit.*, pp. 99-100.

恰もドップラー効果にも似て、話者に近づくときには高い周波数を持ち、絶えず強度を高めるが、一旦話者の傍らを過ぎれば、忽ちにしてその周波数を低め、強度も漸次弱くなって行く。例えば我々が乗り物に乗り、遠くに踏切の鐘の音を聞くとする。その音は電車を待つ時に聞く音に較べて甲高くさえあり、絶えず大きくなって来る。然し踏切を過ぎるやいなや、その音はたちまち低く聞こえ、やがて音量を減じて幽かになって行く。その遠ざかり行くという感覚が、聞くものにながしかの感懐を催させる契機になることはあろう。

§13 然しそれだけでは足りないかも知れない。このときの感情のたゆたいは、ある事件を親しく見聞し、その経過を具さに見守った経験と重なる時、より大きなものとなる可能性がある。すなわち第二の条件である。これを仮に過去に於ける参照点の存在といってもよいであろう。imperfectumはこの様なときに用いられる潜在的な可能性を秘めているという事ができよう。ここで可能性というのは、一定の「低回性」を持ちながらも、その事件を追跡することに主眼を持つ使用の仕方も、また一再ならず認められるからである。古ロシア語の年代記などに徴して見れば、未完了過去はアオリストによって示される事件の間に挿入されて、その背景を説明するときに、屢々用いられるのはこの故であろう。また古典語についていえば、例えば現在手紙を書いているときに、これを相手が読む時点を想定して *scribebam* 「私は書いていた」という言い方 (epistolary imperfect) もある。例えばキケローがアッティクス (Atticus) 宛に書いた紀元前44年11月11日付の手紙には、次のようにある。

#### §14

*De Antoni itineribus nescio quid aliter audio, atque ad te scribebam.*

「アントニウスの旅(進軍)については、何か判らないが君に(今)書いているのと違ったように聞いている。」 (*Epistolae ad Atticum, Liber XVI, 13c.*)

このような例は特に *scribo* 「書く」という動詞には、その性格上極めて多いが、必ずしもこの動詞に限ったことでもなく、また「現在」ではなく、「未来」に関わる場合もある。その何れも、手紙が相手に読まれるときには、過去のことになることは間違いがないが、動詞によって表される行為が現在であれ、未来であれ、話者の直接に関与するものとして表されていることが肝要である。例えば、同じくキケローが紀元前44年5月11日に書いた手紙の中には次のような箇所がある。

*Haec scripsi seu dictavi apposita secunda mensa apud Vestorium. Postridie apud Hirtium cogitabam et quidem πεντέλοιπον.*

これ(手紙)を私はウェストリウスのところでデザートが出た折りに書いた、というより口述した。次の日(明日)には私は五人衆の生き残りの<sup>13</sup> ヒルティウスのところに(行こうと)考

<sup>13</sup>E. O. Winstedt はこのギリシア語をドラペラの護民官としての行為に言及したものとしている (Loeb classical library, Cicero, *Letters to Atticus*, III, p. 287) が、Tyrrell and Purser はこの語に疑問を呈している。cf. Tyrrell and Purser, *The Correspondence of Cicero*, Vol.V, Second Edition, Dublin-London

えている。

§15 古ロシア語で imperfectum が背景説明をしているところは随所に見られる。例えば、

И въвѣденъ бысть въ корабль, и въсаженъ бысть въ бочку, имущи 3 дна при единѣмъ конци, за нимъ же Исаковиць сѣдѣше, а въ другомъ конци вода, идеже гвоздь: нѣлзѣ бо бѣше инако изити из града; и тако изиде из Грѣчьскѣи земли.

*Новгородская первая летопись старшего и младшего извода*, М.-Л. 1950, Синод. список, л.65.

(イサキオスの子)は船に連れていかれ、三つの底を持った樽の中に座らされた。その中にイサキオスの子が座っていたのであるが、また他方のはしには水があり、底には釘があった。なぜならそれ以外に町(i.e. コンスタンティノポリス)から出ることができなかつたからである。このようにして(彼は)ギリシアの国から脱出した。

これは第IV次十字軍によるコンスタンティノポリスの陥落の一節である。傍点で示したのは未完了過去形、下線によって示しているのはアオリストである。アオリストによって述べられる事件の推移に対して、未完了過去がその背景を説明している様子がよく理解できる。ここには何らの感興の入る余地もないといえる。

§16 勿論、未完了過去には低回性の強く感じられる場合に使用されることも多い。例えば、

Тои осени много зла ся створи: поби мразъ обилье по волости, а на Тържockу все чело бысть. . . . . А новѣгородѣ зло бысть вельми; кадь ржи купляхуть по 10 гривень, а овса по 3 гривнѣ а рѣлѣ възъ по 2 гривнѣ; ядяху люди сосновую кору и листь липовъ и мохъ. О, горѣ тѣгда, братъе, бѣше: дѣти свое даяхуть одърень; и поставиша скудельницу, и наметаша полну. О, горѣ бѣше: по търгу трупиe, по улицямъ трупиe, по полю трупиe, не можашу пси изѣдати челоуѣкъ;

*Новгородская первая летопись*, Синод. сп., л. 81R-81V.

その秋、大きな災いが起こった。寒気が州一帯を襲ったがトルジョーク(の町)は全く無事であった。……ところがノヴゴロドには大きな災いがあった。ライ麦一樽を(人々は)10グリヴナで、燕麦(一樽)は2グリヴナで、また(荷車)一台の燕麦は2グリヴナで買ったのである。人々は松の皮も、菩提樹の葉も、苔も食べた。おお、はらからよ、この時の悲しみは大きなものであった。(人々は)己の子供をただで(奴隷商人に)与え、共同墓地を設け、(屍体

1915, p. 301.

なお epistolary tenses に用いられるのは、なにも「書く」という動詞に限られないし、また未完了過去形に限ったことでもない。例えば、Nihil erat absoluti. (Ad Atticum, I, xvi-18)「何も解決してはいない。」(impf.)、Commentarium consulatus mei Graece compositum misi ad te. (Ad Atticum, I, xix-10)「私のコンスル職の覚え書きをギリシア語で書いたものを君に送るつもりです。」(pf.) など、随所に見受けられる。またギリシア語にも同様の書簡体があるという。μετ' Ἀρταβάζου, ὃν σοι ἐπέμψα, πρᾶσσε. (Thuk.1.129.3)「私が派遣するアルタバソスと交渉せよ。」(aorist) cf. 高津春繁『ギリシア語文法』岩波書店(1960), p. 331.

を)満ちあふれるまで投げ入れた。おお、悲しみがあつた。広場には屍体、通りには屍体、野原には屍体、犬どもは人間を食べ尽くすことができなかつた。

これは6723年、即ち西暦1215年の出来事である。共同墓地にする縦坑は恐らく次々に掘られ、また屍体も次々にこれに投げ入れられたことは間違いがないと思われるが、これは見られるように未完了過去形ではなく、アオリストによって示されている。このことから、未完了過去が深い悲しみの表現となっていることは明らかである。

これらのことは、疑いもなく未完了過去が低回性を発現する契機を持っていたことを表すが、同時に常に低回性を伴っていたと断ずることもまた、一面的の譏りを免れないであろう。

### 3. アオリスト

§17 既に述べたことから明らかなように、アオリストは事件を単に「あつたこと」として述べる形であるということができよう。これはいわば「参照点」を設定することなく、発話の時点から事件が確実に起こつたことを述べる形式であると考えられる。既に述べたように、時間は絶えず過去の方に流れ去っていくものであるから、確実に生起し、時間の軸の上に自己の位置を確立した事件もまた、それと共に過去の方に遠ざかつて行く。このことによって、アオリストによって示される事件は、話者がその位置を設定する毎に、恰も時間的に順次相対的な「未来」へと推移しているかの如く感じられるのであろう。印欧語的にはこの形式は行為の生起が確実にあることを示すと考えられているようであるが<sup>14</sup>、例えばギリシア語の場合、汎時的真理を表すいわゆる箴言的アオリスト *gnomic aorist* の存在も、このことを裏付けているようである。例えば、

\* παθών δέ τε νήσιος ἔγνων. Hesiod. Erga 218.

「愚者は苦い目にあつて学ぶ。」

\* ἦπιτε δ' ὥς ὅτε τις δρῦς ἦριπεν. Homeros II 482.

「彼は、榿の木が倒れる如く倒れた。」<sup>15</sup>

高津はアオリストについて次のように言う。

アオリストは不完了と同じく、従属節(特に時間、理由を表わすもの、関係節)に於いて、主文の時より相対的に以前の時を表わすことが多い。しかしこれは不完了の際にも述べた如くに、アオリスト自身の有する文法的時に由来するものではなく、全く文脈によるもので

<sup>14</sup>メイエは現在とアオリストの語幹の相違について、前者が発展の相を表すのに対し、後者は「純粹で單純な」行為を表すとする(*cf.* 原文6)。この所説は恐らく、アオリストの語根の母音度が零階梯であることと関係があるものと思われる。

<sup>15</sup>高津春繁『ギリシア語文法』岩波書店(1960), pp. 333-334.

あって、これを相対的時間を表わすと考えるのは近代西欧語の感覚を古代ギリシア語にもちこむものである<sup>16</sup>。

事件の生起が確実であるものが、過去に傾くことは理の当然であるといえよう。アオリストが印欧語の下位方言において専ら過去時を表すようになったのも、その基本的機能の然らしめたものであると考えられる。

#### 4. 完了形

§18 スラヴ語においては本来完了形は、能動過去分詞第Ⅱ形 *participium praeteriti activi secundum* と称される、\*-lo- の接尾辞を持つ動詞派生の分詞が *esse* を表す *быти* を伴う形であった。これが確認の意義を持っていることは、別の場所で既に論じたところである<sup>17</sup>。

これを若干再録すれば、完了形はその確認の意義から、屢々直接話法の二人称に現れ、相手に対して相手の行った行為を明確に示して、いわば念を押す場合に多く認められる。例えば、

въ лѣто 6644. Индикта лѣта 14. новгородъци призваша пльсковиче и ладожаны и сдумаша, яко изгонити князя своего Всѣволода, и въсадиша въ епископль дворъ, съ женою и дѣтьми и съ тѣщею, мѣсяця мая въ 28; и стоажьбъ стрежаху день и ночь съ оружиемъ... А се вины его творяху: 1, не блюдетъ смердъ; 2, «чему *хотѣлъ еси сѣсти Переяславли*»; 3-е, «*хотѣлъ еси съ пълку преди всѣхъ*», а на то много; на початыи велѣвъ ны, рече, къ Всѣволоду приступити, а пакы отступити велить»; не пустиша его, донелѣже инъ князь приде.

Новгородская первая летопись, Синод. сп., л.7R-17V.

6644(1136)年。インディクトの14年。ノヴゴロドの人々はプスコフの人々およびラドガの人々を呼び寄せ、自分たちの公フセヴォロドを追い出そうと相談し、5月28日、妻と子供達、および姑と共に主教の邸に入れ、夜も昼も武器をもった見張りが見張っていた。……(人々が)彼の罪としたのはこれである。1. スメルドを大切にしないこと、2. 「あなたがペレヤスラヴリの公になろうとしたからです」、3番目は「あなたは軍勢を率いて皆より先に(戦場から)去り、しかもそれが数多くあったことです。はじめには我々にフセヴォロドに攻めかかるように命令したのに、後では退くように命じました」と(人々は)言った。(人々は)新しい公が到着するまで、彼を解放しなかった<sup>18</sup>。

§19 次の例はアオリストとの対比という点で、極めて興味深いものである。

Тѣгда же оувѣдавше татари, оже идоуть русстии князи противоу имъ, и прислаша послы, къ русскимъ княземъ: «се слышимъ оже идете противоу насъ,

<sup>16</sup>高津春繁 *op. cit.*, p. 331.

<sup>17</sup>拙稿「完了時称の機能」『古代ロシア研究』第18巻(1991), pp. 75-102.

<sup>18</sup>拙稿 pp. 83-84.

послушавше половьць; а мы вашей земли не *заятомъ*, ни городъ вашихъ, ни сель вашихъ, ни на васъ *придохомъ*, нъ *придохомъ* богомъ пущени на холопы и на конюси свое на поганья Половче; а вы възмите с нами миръ; аже выбежать къ вамъ, а биите ихъ оттолбъ, а товары емлите к себе: занеже *слышатомъ*, яко и вамъ много зла *створиша*; того же дѣля и мы биемъ».

Того же рустии князи не *послушаша*, нъ послы *избиша*, а сами *поидоша* противу имъ; и не дошдьше Ольшья, и *сташа* на Днѣпрѣ. И *прислаша* к нимъ второе послы Татари, рекуще тако:

«а есте *послушали* Половьчь, а послы наша есте *избили*, а идете противу нас, ть вы поидите; а мы васъ не *заяли*, да всѣмъ богъ»; и *отпустиша* прочь послы ихъ.

*Новгородская первая летопись*, Синод. сп., л.97R-98R.

この時タートルはルシの公たちが彼らに向かって攻めてくることを知り、ルシの公たちのもとに使者を送ってきた。「私たちはあなたがたがポロフツィの言うことを聞き私たちに向かって兵を進めていると聞いていますが、私たちはあなたがたの国も町も占領してはいません。私たちはあなたがたを攻めにきたのではなく、ホローブ(奴隷)であり、自分たちの馬丁である異教徒のポロフツィに対して神が差し向けられて来たものです。あなた方は、私たちと和を結び、彼らがあなたの方のもとに逃れて来ても、そこから叩き出し、財物を自分のものにしてください。なぜなら私たちは彼らがあなたの方に対して多くの悪を行ったと聞いているからです。私たちが戦っているのもそのためです。」

ルシの公たちはそれに耳を貸さず、使者を殺し、自分たちは彼らに向かって兵を進めた。彼らがオレシエまで行かず、ドネブルのほとりに陣を布いたとき、タートルは彼らのもとに二度目の使者を送ってきて、言った。

「あなた方はポロフツィの言うことを聞き、私たちの使者を殺し、私たちに向かって兵を進めていますが、(それなら)来なさい。だが私たちはあなたがた(の国)を占領したことはありません。神がすべてを知っておられます」と。

§20 これは1223年と伝えられるモンゴル・タートル軍の来襲の記事である。ジェベと猛将スブダイに率いられるモンゴルの支隊が、サマルカンドを目指すチングス汗の本隊から分かれてルシに初めて侵攻した。その途次モンゴル軍は兼ねてよりルシの辺境を侵すことの甚しかった遊牧民ポロヴェツツ軍を撃破したが、ただ一人逃れた酋長コチャンは娘がガリーチ公ムスチスラフに嫁していたことから、多くの贈り物を携えて来援を乞うた。これがこの記事の背景をなしている。

上掲の例文中イタリック(傍点)にしているのはアオリスト、下線(ゴチック)にしているのは完了形である。タートルの汗が送った第一の使者の口上には、過去時称としてすべてアオリストが用いられている。全体の調子は明らかに客観的な事実の叙述の形をとって、自己の立場をルシの公に説明しようとしている。ところがルシの公たちが使者を誅殺して出陣すると、第二の使者の口上は一転して相手の非を鳴らす威嚇的なものとなり、過去形はすべて完了形にとって替えられる。ルシの公たちが第二の使者を生きたまま帰らせたの

も、宜なる哉と思わせる。ここでは完了形はすべて事実の確認のために用いられていると考えられる<sup>19</sup>。

§21 完了形が地の文に用いられるとき、屢々従文中において主文のアオリストの背景を示すと考えられている場合がある。例えば、

И почаша ѣздити оканьнии по улицамъ, ищюче дома христьяньскыя: зане навель богъ за грѣхы наша ис пустыня звѣри дивия ясти сильныхъ плъти и пити кровь боярьскую.

*Новгородская первая летопись, Синод. сп., л.138R.*

呪われた者たち(sc. タタール)は通りを回り始め、キリスト教徒の家々を記録した。なぜなら神は私たちの罪の故に荒野から強い者たちの肉を食べ、貴族の血を飲むために野獣を差し向けられたからである。

筆者をはじめ、これらの例における完了形を、主文の行為に先立つ行為を示すものと考えていたが、未完了過去形と対比すれば、単なる背景の説明ではなく、主文の行為の依って来る所以のところを確認するものと考えの方が、より適当であると思うようになった。例えば次の例である。

ходи Мирославъ посадникъ из Новагорода мирить кыянь съ церниговци, и приде, не оуспевъ ницто же: сильно бо възмялася вся земля роусская.

*Новгородская первая летопись, Синод. сп., л.16R.*

市長官ミロ斯拉フはノヴゴロドから行ってキエフの人々とチェルニゴフの人々とを和解させようとしたが、何も果たせずに帰ってきた。ルシの国全体が激しく動乱していたからである<sup>20</sup>。

§22 以上述べ来たったことから、この形式が「確認確述」の形式であるという細江の主張は、肯綮に当たっていると思われる。しかしもしそうとするならば、これは冒頭に述べた仮説とどのような整合性を持つであろうか。細江は彼のいう「確認確述」について次のように説明している。

…私は今こゝに所謂“Present Perfect”なるものは『確認確述』の語形であると言はんと欲する。即ちその描出する事件そのものが客観的な時間の内に過去界に属するものであらうとも、將又現在界に入るものであらうとも、乃至は過去界より現在界に亙り何等かの連係を有するものであらうとも、それは根源的には何の問題でもないのである。只その陳述さるゝ事件が、言者の發言する際その知覺意識内に強力なる印象を與へて居る時、それを明瞭確實に表示するのが此語形の本義であるのである。而してその『現在完了』といふべきものを示すことの多いのは然る關係に立つものが最も『確認確述』の對象たることが多いからであ

<sup>19</sup> 拙稿 pp. 85-86.

<sup>20</sup> 拙稿 p. 99.

るに過ぎない<sup>21</sup>。

アオリストが時間の流れに沿って遠ざかり行く行為を、話者の観点から示し、未完了過去がこれを過去のある時点を参照点として示すものであるとすれば、(現在)完了形の職能は、過去の行為を遠ざかり行く時の流れから、話者が一時拾い上げようとするところにあると考えてはならないであろうか。この考えは余りにも牽強附会の説のように聞こえようが、もしそうとするならばそれは対象とする行為の確かにあったことの確認でもあり、また話者との関係において完了ともなり、またこれによって示される事件が強く印象づけられることにもなろう。そのためには、少なくともこのような考え方に対する反証の存在が吟味されなければならないが、とりあえず仮説として提示しておきたい。

完了形はやがて確実に起こった事件を表すアオリストの機能を表すものと、かつての未完了過去形の機能を引き継ぐものとに分かれたが、前者は完了体動詞となり、後者は不完了体動詞となって、アスペクトの範疇が成立するに至った。この範疇の確立の過程で、アオリストと未完了過去は消滅するが、現在では通常用いられることのない、いわゆる多回体接尾辞を伴う非前綴動詞が、強い低回性を表す用法があった。例えば、

Старушка ей: «А вот камин;  
Здесь барин *сжизвал* один.  
Здесь с ним *обедывал* зимою  
Покойный Ленский, наш сосед.  
Сюда пожалуйста, за мною.  
Вот это барский кабинет;  
Здесь почивал он, кофей кушал,  
Приказчика доклады слушал  
И книжку поутру читал...  
И старый барин здесь *жвал*;.....

老婆は彼女にいう。「ほらこの暖炉。  
ここで旦那様は一人でお座りなさって、  
冬になるとあの方とお食事をなさいました。  
亡くなったご近所のレンスキー様ですよ。  
ここで旦那様はお寝みになられたり、コーヒーをお上がりになられたり、  
手代の報告をお聞きになられたり、  
朝からご本をお読みになられたり.....  
お年を召した旦那様はここで暮らしていらしたのです。.....

『エヴゲーニイ・オネーギン』 第7章 VII-XVIII節

## 5. 現在形

§23 既に述べたように、一定の事件ないし行為を構成する行為(例えば「行く」という行為における一回の「歩み」という行為)が存在するとき、これを構成行為と称すること

<sup>21</sup>細江逸記 *op. cit.*, p. 78.

にすれば、この構成行為が更新されている間は、被構成行為、即ちこの構成行為から成り立っている行為は、継続していると考えられる。従ってこの場合、事件ないし行為が過程の進行という形で現れることの多いのは、いわば当然であるといつてよいであろう。逆に現在形はこのようなものとして事件を表現しようとするものであると考えれば、この形式が細江のいう、「直感直叙」の形式にならざるを得ないのもまた、一の必然とされよう。

また「学校へ行く」という表現に関して述べたように、この種の構成行為が目的地(例えば学校)の敷地内において行われるようになるまで、次々に更新されるという確信ないし意図が存在するならば、発話の時点はこの構成行為によって構成されるどころの被構成行為の中間に存在するであろう。もしこのような構成行為に終焉が存在せず、永遠に続くと思えるならば、それは「一般的真理」を表すことになるであろう。例えば「地球は太陽の周りを回っている」という表現を考えてみるがよい。この場合の構成行為は一度の周回である。そしてその周回は終焉がないと観念されているのである。

§24 それではこのような構成行為が存在しない、いわば単一の行為の場合はどうであろうか。もしこの行為が過程を表さないか、時間的に極めて短い間に完了するものであるとしたならば、それは現在の一瞬に生じ、直ちに過去へと流れ去るに違いない。この種の動詞が多く過去形に現れるのもまた当然である。しかしその一瞬を捉えて現在形を持って表現することはなお可能であると考えられる。その場合には一瞬を捉えるということの注意の集中の度合いには、範疇を別する高さが存在すると考えるのが至当であろう。

§25 特に完了体動詞が口語的な物語に用いられる現象は、従来の規定からは十分な体系的説明を加えることができないために、現在でも未だ多くの議論があり、また説明も *ad hoc* なものが多いのが現状である。しかしこれは参照点における現在として説明が可能であると思われる。たとえば、

А бросится Змеища Горынчища,  
Чуть его, Добрыню, огнем не спалил. Кирша Данилов

そこで(大蛇の)ズメイシチャ・ゴリンチシチャは跳びかかり、  
すんでのところ彼、ドブリニャを焼き殺すところだった。 『プリーナ』

Снарядился Святогор во чисто поле гуляти,  
Заседлает своего добра коня  
И едет по чисто полю. Буслаев, Хрест., p. 385.

スヴァトゴルは広野に散歩する準備をし、  
駿馬に鞍を置き、  
広野を馬で行く<sup>22</sup>。

<sup>22</sup>Baldur Panzer, *Die Funktion des Verbalaspekts im Praesens historicum des Russischen*, München

§26 構成行為を含まない単一行為を表すものとして、ロシア語には接尾辞 *-nu-* を以て構成される、一群の動詞が存在する。例えば *мелькать* 「ちらちらする」に対する *мельк-ну-ть* 「閃く、ちらつとする」、*кричать* 「叫び声を上げる」に対する *крик-ну-ть* 「一声叫ぶ」のような場合である。例に見られるように、この接尾辞は一連の構成行為の中から一つの構成要素だけを抽出する働きを持っている。たとえば、

Ах, быстро молодость моя  
Звездой падучею *мелькнула!* А. С. Пушкин, *Цыгань*.

「ああ、私の青春は素早くも、  
流れ星にも似て煌めいて消えた。」 『流浪の民』

Он *крикнул*: “здравствуй, голова!  
Я здесь, наказан твой изменник!” А. С. Пушкин, *Руслан и Людмила*.

彼は叫んだ。「おい、頭よ、  
私はここだ。お前の裏切り者は罰を受けたぞ。」 『ルスランとリュドミラ』

この種の動詞が多く過去形に用いられる傾向を持つのは、それが生起するのが瞬間的であることによって当然であるが、なおいわゆる歴史的現在に屢々用いられる。たとえば、

А и вытянул лук за ухо — калену стрелу, ...  
Хлещет он, Дунай, по сыру дубу,  
А спела ведь тегивка у туга лука,  
А *дрогнет* матушка сыра земля  
От того удара богатырского. Кирша Данилов, X, p. 64.

そこで彼、ドゥナイは耳の後ろから弓の鍛えた矢を引き抜き、  
湿った樫の木めがけてひゅうと放つ。  
強い弓の弦は鳴り、  
母なる大地は震える。  
その勇士の一撃によって<sup>23</sup>。

§27 いわゆる歴史的現在は過去のある一点に話者がいると想定した場合の表現であると考えられているが、著者もその点に関しては意見を同じくするものである。

また場合によっては、それはその行為の生起する一瞬を逃すまいと迫りつつある生起の一瞬を待ち受けることにもなると考えられる。「そら、爆発するぞ、爆発するぞ」というような場合がその典型である。これは発話の時点からすれば「未来」に属するかもしれないが、問題はそこにはない。そこにあるのはただ時の流れが急迫しつつあるという想いである。このような急迫の度が極めて強い場合、換言すれば極めて近い将来に起こると予想

1963, p. 80.

<sup>23</sup>B. Panzer, *op. cit.*, p. 81.

される場合、ないしはその生起が確実であると考えられるとき、行為は未だ生起していないにも関わらず、それは現在によって表現されうると思われる。発話者の緊張は既に現在時において極めて強いと考えられるからである。

或いはまた別の場合、行為の生起した一瞬を捉えて現在形で表現することも、理論的には完全に可能である。この場合にも、表現は比較的強い印象を伴うであろう。

§28 従来の文法によれば、完了体動詞が現在時に使用される場合として、常習的行為、可能性のニュアンスを持つものなどを挙げるのがふつうであるが、これらは被構成行為を表すものとして解釈が可能である。たとえば、

Буря мглою небо кроет.  
Вихри снежные крутя.  
То, как зверь, она завоет,  
То заплачет, как дитя.

А. С. Пушкин, *Зимний вечер*.<sup>24</sup>

嵐は霧で空を覆った。  
雪のつむじ風が舞う。  
それはあるいは獣のように吠え、  
あるいは子どものように泣き出す。

『冬の夜』

И песни, и пляски такой  
За деньги не купишь.  
«Утеха!»  
Твердят мужики меж собой

Некрасов, (ГРЯ60, стр. 484).

こんな歌や踊りは、  
お金では買えない。  
「おもしろい」、と  
百姓達は言い合った。

§29 フォーサイズはここから完了体動詞のいわゆる「未来形」は現在形であるとして、次のように述べている。

完了体未来時称は現在時称と同じ語尾を持っており、文法的意味における相違は語幹、変化あるいは接頭辞の相違によって現わされている。従って例えば *прочитает, скажет, возьмет, получит* のような形が完了体未来であるのは、*читает, получает, берет, говорит* が (不完了) 現在だからである。現在時称と単純未来の語尾が同じであることがこれらの間に存在する関係を明らかにしている。「完了未来」形は事実は歴史的な起源というだけでなく、現代ロシア語におけるその多くの機能において、現在時制の変形である。これらの機能のうち、未来としての機能はその一つに過ぎない。極めて屢々これは未来の意味な

<sup>24</sup> АН СССР, *Грамматика русского языка*, I, Москва 1960, p. 486 (ГРЯ60).

して用いられている<sup>25</sup>……

彼が例として挙げているものの一つは次のようなものである。

В сентябре на Белом море темнеет рано, сумерки коротки, а ночи аспидно-черны и холодны. Вырвется иногда перед закатом солнце из облаков, бросит последний угасающий луч на море, на холмистый берег, желто отразится в окошках высоких изб и тут же побагровеет, сплющится, уйдет в воду.

Тускло светится темно-красная полоска зари, слабо и зыбко сияет высокое холодное небо, а земля, избы в деревне, … — все погружается в темноту, только долго еще светятся в ответ заре свежошкуренные бревна возле правления, и маслянисто блестит, хрустит под ногами щепы.

白海は9月には朝は暗く、薄明は短く、夜は灰褐赤色で冷たかった。時に日没の前太陽が雲の中から現れ、消えつつある最後の光を海の上に、丘の多い岸辺に投げかけ、高い納屋の窓に黄色く映えて、そこで赤黒くなり、ひしゃげて水中に没する。

暁の茜色の帯がぼんやりと、弱々しくゆらめくようにに輝き、高い寒空が光る。そして大地、村の納屋……すべては闇に沈んでいた。ただ役場のそばの伐りだされた木材がまだしばらくは空やけに映えて輝き、足の下屋根板がぬめるように光って音をたてる<sup>26</sup>……

ここで斜体(傍点)は完了体動詞、下線は不完了体動詞である。これらの表現において、完了体動詞と不完了体動詞が競合しており、そのどちらを用いても、同一の事態が表現可能であるとするならば、単に両者が意義的に現在を示すと指摘するだけでは不十分といわねばならないであろう。なぜある場合に完了体動詞が、また別の場合には不完了体動詞が用いられるのかが説明されなくてはなるまい。筆者はこれまで述べ来たったことから、完了体動詞の使用はそれが一瞬を捉えるために大きな精神の集中を必要とし、それが精彩陸離たる効果をもたらすと考える。フォーサイスの挙げている例における前半は完了体動詞を基調とし、完成に訴えることが大きい、いわば絵画的な効果を持つものに対し、不完了体動詞を基調とする後半部は、いくらか「低回性」をもつ表現の趣があるといえよう。

§30 先に挙げた -nu- の構成にかかる動詞の場合も含めて、完了体現在形は行為の着目する契機が一瞬であることにより、その契機の到来が切迫しつつあるか、疑いないものであると認識されるとき、未だ発話の時点では生起していない行為についても述べることもあり得ると考える。たとえば

Дон Карлос:

… когда твои глаза

Впадут и веки, сморщась, почернеют

И седина в косе твоей мелькнет,

<sup>25</sup>J. Forsyth, *A grammar of aspect, Usages and meanings in the Russian verb*, Cambridge 1970, p. 119.

<sup>26</sup>*ibid.*

И будут называть тебя старухой,  
Тогда — что скажешь ты?

А. С. Пушкин, *Каменный гость*.

ドン・カルロス：  
……お前の眼が  
落ちくぼみ、瞼に皺が寄って黒ずみ、  
お前の巻き毛に白髪が一筋光り、  
老婆と呼ばれるようになったとき、  
その時には……お前は何というだろうか。

『石の客』

§31 状態動詞にはある一つの状態が永続すると感じられる本来の状態動詞と、構成行為が微細であるか極めて等質であって、ために状態と考えられる、非本来的な状態動詞がある。この場合には上述した接尾辞 *-nu-* によってその構成行為を抽出することが、一般にできない。たとえば *вьртѣти > вертеть* 「回転する」、*кыпѣти > кипеть* 「(熱湯などが)たぎる」のような場合である。これらは印欧語の状態を示す接尾辞 *\*-ē-* (cf. Lat. *habēre*) の構成にかかるものであり、状態動詞と考えられていたことは疑いがない。さらに *-e/ou-ā-* の、いわゆる多回体の構成を持つ、たとえば *вълновать* 「波立つ」のようなものもある<sup>27</sup>。このような状態は常識的にはいつか終わると考えるのが当然であり、それがこれらの状態を動詞として表現する根拠となっていると見られるが、ここにはたとえば「学校に行く」という表現に見られるような目的性もなく、具体的に何時終わるとも知れない。従ってこの種の動詞は現在形をもって発話の時点に置いて観察されるか、或いは過去に用いられるが、後者の場合には必ず参照点が必要とされる。過去の場合に参照点を必要としないならば、それはこれらの動詞の表す状態が、同種の行為を構成行為とする被構成行為、換言すれば反復の場合のみであろう。たとえば、

Часто, когда я приходил к нему, отец сидел глубоко в кресле.  
私が父のもとにいったときには、彼はしばしば肘掛けいすに深く(体を沈めて)座っていた<sup>28</sup>。

§32 これに対して状態の終末の時点が語彙に組み込まれている場合には、過去時であっても参照点は必ずしも必須ではない。たとえば、

Не шевелясь и не издав ни одного звука, просидел он таким образом до двух часов другого дня.  
А. П. Чехов (cf. СРЯ).<sup>29</sup>

動かず、音一つ立てないで、彼はそのまま翌日の二時まで坐り通した。

§33 また「しばらく」という意義を持つ動詞接頭辞 *по-* が付加された状態動詞が何故完

<sup>27</sup> 拙稿「状態動詞について」『古代ロシア研究』第12号(1978), pp. 57-62.

<sup>28</sup> J. Forsyth, *op. cit.*, p. 68.

<sup>29</sup> АН СССР, *Словарь русского языка*, Москва 1983.

了のAspectを持つのかという点について、古来いろいろに議論されてきた。これは当時完了のAspectを、行為または状態の始発乃至は完了の時点を表す、と考えていたために、明らかに長さを持った接頭辞をどう解釈するかに苦しんだためである。

この接頭辞の意義の特殊性は、始発の時点と終端の時点の両方を考慮するという点にある。従って終端の時点を考慮する場合には、既に見たように、当然のことながら過去時において必ずしも参照点を必要とはしない。誤解のないように言い添えれば、参照点を持つこともまた、可能であると考えられる。たとえば、

Она *постояла* минуту лишнюю. Он заметил это и, бросил гребень, двинулся к ней.  
Л. Н. Толстой, *Воскресенье* (cf. СРЯ).

彼女は一分あまりたたずんでいた。彼はこれに気がつくと、櫛を投げ出して彼女に近寄った。  
トルストイ『復活』

現在形においては参照点は発話或いは物語の時点に他ならないが、この場合状態が生起してはいるが、まだ終点に到達していない場合と、まだ状態が始まっていない場合とが考えられる。後者の場合は、他の始発の意義を有する動詞と同等の扱いを受けるはずである。前者の場合は、例えば

Гаща сообщила ему, что полк *постоит* здесь некоторое время, так как дивизия ждет пополнения.  
Казакевич, *Весна на Одере* (cf. СРЯ).

ガーシャは軍隊はここにしばらく駐屯するだろうと彼にいった。大隊が補給を待っているからである。

明らかにこの時、軍隊は既に駐留していたと考えられるからである。

未来時称の問題、他動詞におけるAspectの特殊性についても、述べるべきであると考えられるが、考察を加える必要があるが、紙数も既に尽きた。他日を期すより外はない。

(1998年2月11日脱稿)

## [参考]

## 原文

1. Die Aktion kann druativ sein, wenn die Handlung fortlaufend sich entwickelt, ohne daß sie sich auf einen einzelnen Punkt (weder den Anfangs- noch den Endpunkt) bezeichnet. Die verba, welche eine solche Aktionsart ausdrücken, sind *imperfektiv*, also Verba des unvollendeten oder *imperfektiven Aspektes*.  
.....  
II. Die aktion ist *perfektiv* und das Verb von vollendetem oder *perfektivem Aspekt*, wenn es eine punktuelle (sich auf einen gewissen Punkt beziehende), momentane oder terminative (sich auf einen erreichten Zustand beziehende) Handlung ausdrückt.
2. Pojem skončení pro D (i.e. dokonavé sloveso) by zároveň vytýkal opačný rys pro ND (i.e. nedokonavé sloveso); “skončenost” je pojem nepřesný, hledí jen ke konečné fázi děje, pomíjí fázi počáteční. Kromě toho je třeba lišiti skončenost děje, t.j. hotovost děje od dokonavosti, srov. nedokonavá slovesa v praeteritu, kde se tím, že je děj časově zařazen do minulosti, zároveň udává, že je děj již uplynulý, tedy blíží se k odstínu skončenosti a přece není dokonavý.
3. Aspekt und Tempus sind, wie ich mich schon verschiedentlich bemüht habe zu zeigen, die sprachlichen Ausdrucksmittel zur Darstellung zweier auf den Hauptkomponenten der Zeitkonzeption: — Bewegung und Lageverhältnis — beruhender Arten des Zeitbezuges. Der Aspekt dient dem Ausdruck des Richtungsbezuges, das Tempus dem des Zeitstufenbezuges. Beide wurzeln im Gegenwartsbewußtsein des Ich des Sprechenden und in den Beziehungen, die das Ich zwischen Sich und dem darzustellenden Geschehnis hinsichtlich der Richtung und des Lageverhältnisses von Ich und Geschehnis in der Zeit herstellt.
4. Der Gegensatz eines aus der Zeit ausgeschalteten Ich, das die Zeit an sich *vorbeistreifen* läßt, und eines in die Zeit eingeschalteten Ich, *über das* die Zeit *hinweggeht*, existiert für unsere Frage ebensowenig wie der Gegensatz eines aus der Zeit ausgeschalteten Ich, das *außen an der Zeit entlanggeht*, und eines eingeschalteten Ich, das in immer weitere Zukunft hineinwächst (konsequent müßte es heißen: das *innen in der Zeit entlang geht*). Es unterliegt m. E. nicht dem geringsten Zweifel, daß ein Ich, sobald es zu den Zeitstellenwerten in einer der beiden Bewegungsauffassungen in Beziehung gesetzt wird, eo ipso in die Zeit

*eingeschaltet* ist. Ein Ich, das die Zeitstellenwerte an sich vorbeistreichen läßt, ist eben dadurch in die *Zeit* eingeschaltet. Die *Zeit* ist doch in diesem Bilde als Bewegung gedacht. Diese Bewegung ist relativ. Daher gibt es zwei Bewegungsauffassungen in der Verschiebung zwischen Ich und Zeitstellenwert: Ich in Ruhe — Zeitstelle bewegt, oder: Zeitstelle in Ruhe — Ich bewegt...

Das Am-Ich-Vorbestreifen und das Über-das-Ich-Hinweggehen aber sind rein äußerlich andere Ausdrücke für *dieselbe* Bewegungsauffassung ebenso wie das Immer-weitere-Zukunft-Hineinwachsen und das Außen-an-der-Zeit-Entlanggehen.

5. Warum aber kann in der Koinzidenz die Perfektivität eine Gegenwart bezeichnen? Die Koinzidenz von Sprechen und Tun ist nur in der Gegenwart denkbar, da in Vergangenheit oder Zukunft nur *über* etwas gesprochen werden kann.

Wenn ich aber in der Gegenwart ausdrücken will, daß das Aussprechen meiner Worte eben die Handlung "ist", von der ich spreche, so drücke ich das "Eintreten" dieser Handlung in der Gegenwart aus, und das kann ich in der Gegenwart, weil eben das Aussprechen des betr. Wortes das Wirklichkeitwerden der Handlung ist. Es stehen sich in diesem — aber nur in diesem Falle — "Währen" und "Eintritt" einer Handlung in der Gegenwart gegenüber wie sonst in Vergangenheit und Zukunft in jedem Falle. Wenn also die Koinzidenz den "Eintritt" in der Gegenwart bezeichnen soll, so ist die Perfektivität hier durchaus am Platze.

6. En grec, le thème de présent indique un procès considéré dans son développement, dans sa durée; le thème d'aoriste, le procès pur et simple: l'un peut être symbolisé par une ligne, l'autre par un point. Soit la phrase suivante de Xénophon (Hell. I, 1, 3): ἐμάχοντο μέχρι οἱ Ἀθηναῖοι ἀπέπλευσαν, le sens est: «ils ont combattu (action envisagée dans son développement et sa durée, d'où l'imparfait) jusqu'au départ des Athéniens» (le fait pur et simple du départ est envisagé: d'où l'emploi de l'aoriste). A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris 1922, p.249.

## Summary

### **Aspects and Tenses: Especially in Praeterital Forms**

In search of the very essence of the verbal aspect, many kinds of proposals have been made, especially in the field of Slavistics, without bringing forth results that can elucidate this extremely complicated problem in its full extent. Though almost all of the students in this field seem to be fully aware of the fact that verbal category relates closely with the category of time to bring forth every concrete category of the verbal tenses, no one but Erwin Koschmieder has reconsidered the real essence of the category of time as conceived in language users. Time expressions have been defined only in relation to the relative chronology between an action to be expressed by a speaker and the moment of speech itself.

E. Koschmieder argues in a series of his articles that a speaker moving into the future feels that time flows with him in the same direction, and the event he meets with is felt as if it were developing before his eyes (the imperfective aspect). If, however, he feels himself to be resting in the axis of time, the event which has occurred is felt to be coming from the future in the direction of the past. This is the case of the perfective aspect.

In spite of this unique and interesting theory concerning the direction of the time stream, Koschmieder confines himself only to the interpretation of the verbal aspect; and, as regards tenses, he employs the traditional view of relative chronology.

The author here hypothesizes that the concept of flowing time is also essential for the language consciousness of time. But in contrast to the Koschmiederian theory, he considers that the direction of the time stream is always running from the future to the past, and that what is of importance for a speaker is not the direction of the time flow itself, but the feeling that the event he has in mind either retreats further and further into the past or incessantly approaches nearer and nearer.